

言語社会研究科 博士審査要旨

論文提出者 米山 優子

論文題目 『古スコッツ語辞典』の成立 — スコッツ語辞書編纂の歴史と思想—

論文審査委員 久保内 端郎教授、糟谷 啓介教授、井上 義夫教授

1. 本論文の構成

序章 問題の設定

第1章 スコッツ語ということばについて

1. スコッツ語の歴史

- 1-1-1 スコットランド王国の国家語として — 初期スコッツ語
- 1-1-2 文芸復興の萌芽 — 前中期スコッツ語
- 1-1-3 衰退の兆しとその原因 — 後中期スコッツ語
- 1-1-4 “King’s Scots”から“King’s English”へ — 近代スコッツ語への過渡期
- 1-1-5 知識人たちのジレンマ—スコットランド啓蒙期の言語状況
- 1-1-6 「常緑」の古スコッツ語文学への回帰
- 1-1-7 スコットランド啓蒙期の二面性と近代スコッツ語
- 1-1-8 19世紀以降の近代スコッツ語

2. スコッツ語の特徴

- 1-2-1 発音
- 1-2-2 綴り
- 1-2-3 語彙
- 1-2-4 文法
- 1-2-5 地域変種

3. スコッツ語についての様々な見解

第2章 スコッツ語を扱った先駆的な辞書 — ジェイミソンの『語源辞典』を中心に

1. ジェイミソンの『語源辞典』

- 2-1-1 『語源辞典』作成のきっかけ
- 2-1-2 『語源辞典』の内容
- 2-1-3 「スコットランド語の起源に関する論文」
- 2-1-4 ジェイミソンの語源研究とスコットランド啓蒙思潮

2. OED と『英語方言辞典』

3. 『語源辞典』以後のスコッツ語研究

第3章 DOST 編纂史（1）

1. 計画

3-1-1 計画の端緒

3-1-2 目的

3-1-3 記述範囲 — 年代の範囲と資料の範囲

2. 記録

3. 記述

3-3-1 収録語項目例—DOST のマイクロ構造

3-3-2 編集の工程

3-3-3 語義の分析と定義付け

3-3-4 引用の選択

3-3-5 古スコッツ語を扱う際の問題点

4. DOST と関連するスコッツ語研究 — 近代スコッツ語に関する出版

3-4-1 『スコティッシュ・ナショナル・ディクショナリー』(SND)

3-4-2 『スコットランド言語地図』

3-4-3 『スコッツ語訳新約聖書』

第4章 DOST 編纂史（2）

1. シカゴ大学出版局との関係

2. OED 依存型の編集法

3. 1981 年の査定

4. 新規巻き直しの試み — エイキン引退後の DOST

5. 1994 年の査定

6. 1996 年の査定

第5章 DOST の編纂者 — クレイギーとエイキン

1. クレイギー

5-1-1 世界を巡る「博言学者」

5-1-2 クレイギーのスコッツ語観 — 古スコッツ語は「言語」

5-1-3 スコッツ語とヨーロッパ諸語との関連

5-1-4 初代編集主幹として

2. エイキン

5-2-1 スコッツ語研究の父

5-2-2 エイキンのスコッツ語観 — スコッツ語は「半言語」

5-2-3 スコッツ語と言語計画理論

5-2-4 クレイギーの後継者として

3. 後任者から見た二人

第6章 DOST 作成を取り巻く社会的側面

1. DOST を支えてきた運営組織と支援団体
2. スコットランドの言語政策との関連：スコッツ語辞書とスコッツ語教育
 - 6-2-1 ナショナル・ガイドラインの見直しと教材の開発
 - 6-2-2 DOST と SND から生まれたスコッツ語中型辞典
3. スコッツ語辞書作成事業への助成
4. 行政におけるスコッツ語
5. 北アイルランドのスコッツ語の状況

終章 スコッツ語辞書の今後の展望

1. *DOST* の編纂史を通して見えてくるもの
2. スコッツ語とスコティッシュ・アイデンティティー
3. *DOST* 完成後の新たな取り組み — スコッツ語の今後の展望

書誌

2. 本論文の概要

本論文は、スコットランドの人口の約30%(約170万人)が話すとされるスコッツ語 (Scots) の成立、ならびにその定義から、『スコティッシュ・ナショナル・ディクショナリー』(*The Scottish National Dictionary*, 1931-1976) 『古スコッツ語辞典』(*The Dictionary of the Older Scottish Tongue*, 1937-2002; 以下 *DOST* と略す)成立の過程と完成のもつ意義と課題を述べ、将来の展望を問うものである。

第1章では、スコッツ語が、ノルマンによるイングランド征服後、スコットランドでどのようにして成立し、その後の印刷術の発明、宗教改革、イングランドとの合併などによってどのように変化したかが、主にスコットランド人民のスコッツ語に対する意識の変化に即して叙述される。次にスコッツ語の言語内的特徴が考察され、言語としてのスコッツ語の位置付けがなぜ困難なのかを検討されている。

第2章では、スコッツ語の先駆的な辞書、なかでも「歴史的原則」の原型を呈した辞書として重要なジョン・ジェイミソン(John Jamieson, 1759-1838)の『スコットランド語源辞典』(*An Etymological Dictionary of the Scottish Language*, 1808)を取り上げ、スコッツ語辞書編纂に向けられてきた編纂者の理念が論じられている。

第3章は、*DOST* の編纂史の前半を対象とする。*DOST* が計画された経緯と編纂の目的、収録語及び対象とする引証文献の範囲について述べるとともに、実際の編集作業の工程を概観し、

*DOST*の収録語項目を例示して、記述内容が説明される。また、スコッツ語の言語外的な特徴を通して、古スコッツ語と近代スコッツ語の捉え方の違いが考察されている。

第4章は、*DOST*の編纂史の後半を扱う。第3章で述べられた編集作業と並行して、出版の段階に入った*DOST*が完成に至る経過が、編集方針と編集部の運営を中心に述べられる。

第5章では、*DOST*の編集主幹であるクレイギーとエイトキンのスコッツ語の捉え方と辞書編纂に対する取り組みなどが、言語学者としての彼らの思想と関連させて述べられる。

第6章では、*DOST*作成に係わる社会的側面が考察される。*DOST*の編集部がどのように運営されてきたかについて、スコットランド行政府(Scottish Executive)、スコットランド学術評議会(Scottish Arts Council)などによる助成の状況が考察される。また、スコットランドの言語政策に言及しながら、特に1980年代以降顕著になってきたスコッツ語に関する動きの主体となっているものが何か、何を目的とし、どのような成果を収めているかが分析されている。

終章では、*DOST*の成立によって、スコッツ語が抱える諸問題が何らかの打開策を見出せるのか、その可能性が検討される。*DOST*完成後の新たな取り組みについて述べると共に、スコッツ語とスコティッシュ・ナショナリズムとの関係が考察されている。

3. 本論文の成果と問題点

*OED*を補完する時代別辞書の一つであり、地域別辞書の一つではありながら全12巻に及ぶかなり大部の辞書である*DOST*を対象に真正面から正攻法で取り組んだ筆者の姿勢が、まず高く評価できる。資料の収集は、公文書、書簡などにまでおよび、編纂事業の歴史を丹念に辿り、編集部内の編集方針をめぐる人間関係に至るまで細部にわたる考証に努める傍ら、同時代の同種の辞書編纂事業の調査など横の比較にも努めることにより、バランスのとれた論述となっている。書誌目録も詳細で学術論文に要求される構成と網羅性をそなえているし、本文においても描かれる核心がきわめて明確である。引用文、例証についても典拠が丹念に示され、さらに原文が注で忠実に記録されており、参照がきわめて容易となっている。

また本論文は、社会言語学の観点からも高く評価できる。その理由は、スコッツ語という少数言語——あるいは「使用が減少している言語 (lesser used language)」——において辞書編纂の作業がもつ意味を詳細に描き出したところにある。

スコッツ語に限らず、少数言語においては様々な理由から規範化が進められないことが多く、地理的・社会的に大きな変異性が存在する。たとえば、正書法ひとつとっても、地域ごとに大きな変異が見られる場合がある。そして、こうした変異性の存在が、言語の一体性を確立する際の妨げとなる場合もめずらしくはない。こうした状況で辞書を作成することは、純然たる記録や記述の作業という意味をもつだけではない。少数言語における辞書作成は、それが対象とする言語の威信ないし一体性を表示するという側面をもつ。辞書が言語の歴史を詳細に描き出すことで、その言語の社会的地位の確保につながるのである。ここでとりあげられたスコッツ語辞書は、まさにそうした典型的な場合である。しかし、その一方で筆者は、辞書編纂のなかで現れたさまざまな問題点を無視せず、少数言語にとっての規範化の作業がいかに困難であるかということにも目を配っている。このような研究は、スコッツ語だけでなく、他の少数言語に関しても示唆する

ところが大きく、高い学術的価値をもつと断言できる。

もちろん、多様性の維持と規範の獲得とは矛盾する側面をもっており、そこに少数言語にとっての規範化の問題のむずかしさがあることを、筆者は十分に理解している。筆者は、スコッツ語は方言か言語かという長年の論争は不毛であったと見ており、より社会的現実に応じた視点から、スコッツ語の将来に対する展望を示している。その意味でも本論文は、学問的な客観性を裏切らないかたちで、筆者のスコッツ語に対する情熱がこめられた力作であるといえる。

問題点としては、いくつかの概念の定義に不十分な点が見られることが挙げられる。また、スコッツ語とスコットランド・ナショナリズムとの関連をより突っ込んで論じることができたなら、スコッツ語の言語運動のもつ拡がりをもさらに広い視野で捉えることができたと思われる。

さらに、*DOST* と *OED* の比較に対し、時代的に対応する *MED* (*Middle English Dictionary*) との比較が少ないのが惜まれる。例として 'give' を挙げるならば、三者のエントリーが比較されれば編集方針の重なりの説明などに役立つところがあつたと思われる。同種の辞書編纂事業との横の比較としては、トロント大学の *DOE* (*Dictionary of Old English*) 編纂事業も有益であろう。後発の事業ではあるが、コンピュータ利用の点、コンコーダンス利用の点など、*DOST* がもつ時代的制約の記述の際に参考になる点がある筈である。(Roberta Frank and Angus Cameron, eds., *A Plan for the Dictionary of Old English* (Toronto, 1973) 参照)。また、1928 年からは C.C. Fries、現在は Richard Bailey 教授を主幹とする *Early Modern English Dictionary Project* (ミシガン大学) への目配りも望ましい。中断がちな事業であり、比較材料は少ないが、事業そのものも、またその対象の時期も *DOST* と重なりあふ事業である。

しかしながら、これらの問題点、改善を要する点は、本論文が達成した成果の大きさを損なうものではない。よって審査員一同は、本論文が当該分野の研究に十分に寄与したと認め、一橋大学博士(学術)の学位を授与するのが適当であると考えている。

最終試験結果の要旨

2009年2月18日

受験者 米山優子

最終試験委員 久保内端郎、糟谷啓介、井上義夫

2008年12月22日、学位請求論文提出者、米山優子氏の論文及び関連分野について、本学学位規定第8条第1項に定められた最終試験を実施した。

試験において、提出論文『古スコット語辞典』の成立 — スコット語辞書編纂の歴史と思想 — に関する問題点および関連分野についての質疑を行ない、説明を求めたのに対して、米山優子氏は適切な説明を以って応えた。

よって審査委員一同は、米山優子氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験の合格を判定した。